慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ミドルトンの『魔女』のレディー・ フランセス・ ハワード : ‘wrong’および‘abuse’の多用性を中心に
Sub Title	Middleton's "The Witch" and Lady Frances Howard : frequent usage of ‘wrong’ and ‘abuse’
Author	広本, 勝也(Hiromoto, Katsuya)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.41 (2002. 9) ,p.1- 35
JaLC DOI	
Abstract	The Witch (written before 1617), a tragi-comedy by Thomas Middleton, paints a picture of a society where sex, magic and intrigue are closely related to each other in ordinary life, and where people have an idiosyncratic view of `honesty', i.e. chastity. Throughout the play, such words as `wrong' and `abuse' and their variant forms are frequently found in the discourse of the characters; therefore, I intend to analyse it in terms of the plot, historical background, and language. The characters in this play can be divided into five groups: (1)Sebastian and Isabella, (2)Antonio and Isabella, (3)Antonio and Florida, (4)Francisca and Aberzanes, and (5)the Duke and the Duchess. The main plot focuses on (1) and (2), arousing the audience's curiosity as to who will first cause Isabella to lose her virginity. Of these groups, (5) is the focus of the sub-plot, which shows how the Duchess carries out her revenge against her husband, after she was forced to drink up from a cup made from the skull of her father, who was defeated by the Duke. A side-plot unfolds around (4), revealing the aftermath of Francisca's pregnancy. These events are interspersed with the scenes in which the witches appear, the absurdity of which eases the tension felt by the audience. Wrongdoing is evident in each plot, signalled by such words as `wrong'and `abuse'. Sebastian complains about the injustice of Isabella's marriage to Antonio. The Duke abuses his father-in-law's skull as a wine cup, while the Dutchess manipulates the men surrounding her, making use of her sexual appeal. Francisca pins the guilt on Isabella, who reprimands her for her affair with Aberzanes. In terms of the relationship between these fictional characters and the real personages on whom they may have been based, Antonio resembles Robert Devereux, 3rd Earl of Essex, whereas Sebastian is most likely similar to Robert Carr, Viscount Rochester, (later Earl of Somerset), although different in some crucial areas. Francisca, the Duchess and Isabella may all be partially modelled on Lady Frances Howard, although the first of them has the closest affinity with her, in terms of name, age and character. Furthermore, in various parts of the play can be found what appears to be references to the death of Sir Thomas Overbury, who is said to have been poisoned while confined in the Tower of London. The witches of the title are reminiscent of an astrologist, alchemist, and wise woman whom Frances consulted for advice on obtaining a divorce from the Earl of Essex; the additional implication is that they are women who bewitch men using every trick and wile. However, the author satirises the way women themselves fall into the trap they set in trying to cozen men. The most significant demonstration of this takes place in the final scene, in which the Duchess is astonished to see Almachildes, whom she had attempted to kill, and it is revealed that Hecate's black magic was not, after all, effective.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper

URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20020930-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ミドルトンの『魔女』と
レディー・フランセス・ハワード

——'wrong'および'abuse'の多用性を中心に——

広 本 勝 也

序

トマス・ミドルトン（Thomas Middleton, 1580-1627）の悲喜劇『魔女』（*The Witch*）は，スチュアート朝時代の1610年代に起こった事件——エセックス伯夫妻の離婚に伴なう醜聞に取材している。作者は当時の時局的な問題を背景に，性と政治が複雑に絡み合う出来事を巧みに描写しながら，世間体（reputation）と欲情（lust）を対比し，女性の貞潔（honesty）への男性の偏執を劇の焦点にしている。この作品を読んで，特に注目に値するのは，'wrong'や'abuse'ということばが，キー・ワードのように頻繁に出てくることである。本稿ではこれらを考慮しながら，以下に『魔女』の展開する劇的世界について分析し，論じることにしたい。

I.『魔女』の制作年代

オックスフォード大学ボードリアン図書館に現存する『魔女』の稿本（Bodl., MS. Malone 12: 'A Tragi-Comedie Called the Witch'）は，国王一座（King's Men）の筆耕レイフ・クレイン（Ralph Crane）によるものである。　クレインが筆耕の仕事を始めたのが1619年で，ミドルトンの死去が1627年であることを考えて，この稿本は1619-27年に作成されたとみなされている。稿本のタイトルの下には，「国王お抱え一座によってブ

ラックフライーアズ座で上演されてから久しい」(long since Acted, by his Majesty's Servants at the Black-Friars.) との但し書きが入っている。国王一座が劇場としてブラックフライアーズ座を使用するようになったのは，1609-10 年以後であり，ミドルトンがこの劇団のために定期的に台本を書き始めたのは 1614-15 年頃のことである。このため Elizabeth Schafer は，作品執筆の時期をだいたい 1615-16 年と推測している。[1] また，Peter Corbin と Douglas Sedge は，ミドルトンの主要な悲劇以前で市民喜劇以後の作品であり，文体上の特徴などから 1613-16 年頃だと考えている。[2] 題材に取り入れられているオーヴァベリー殺害事件との関連を考慮すると，『魔女』はおおよそ 1615-16 年頃に書かれた，と推定できるであろう。[3]

II. 時局的な問題

作品の背景を理解するためには，国王ジェームズ I 世時代のイギリスにおけるオーヴァベリー毒殺事件に言及しなければならない。この事件の遠因はフランセス・ハワード (Lady Frances Howard, ?1593-1632) と第 3 代エセックス伯ロバート・デヴルー (Robert Devereux, third Earl of Essex, 1591-1646) の結婚にあった。フランセスはサフォーク伯トマス・ハワードとその二人目の妻キャサリン・ネヴィットの間の次女である。一方，ロバートは第 2 代エッセクス伯とフランセス・ウールシンガムの間に生まれた。

結婚について，子どもたちが自分で相手を選ぶのではなく，親が決めるというのは時代の通念として珍しくなかった。とりわけ 7 人の息子と 4 人の娘を持つサフォーク伯は，子どもたちの結婚相手を決めるに際して富と地位を重視し，父親の権限を行使しなければならないと考えていた。結婚に同意する年齢は男子 14 歳，女子 12 歳だった。フランセスは 13 歳，ロバートはまもなく 14 歳になろうとしていた。[4] 二人は結婚の法定年齢に達していたが，婚約がもたらす将来の生活について考慮し得る年齢とは到

底言えなかった。

しかし，花嫁の持参金を6千ポンドにすること，未亡人になったときの収入を確保することなどについて，両家の間で話が具体的に進められた。1605年10月までに婚約が成立したが，結婚式は国王の臨席を考えて，翌年の初めに引き延ばされた。

1606年1月5日，王宮ホワイトホールのチャペル・ロイヤルで，盛大な結婚式が執り行われた。花嫁を新郎に引き渡す役を引き受けたのは，ほかならぬ国王ジェームズその人だった。重要な地位にある貴族や宮廷人たちが皆，この式典に出席し，新郎新婦には数多くの高価な贈り物が与えられた。その中には，宝石や現金に加えて，3千ポンドの銀皿，千ポンド相当の品物などがあったという。

二人の結婚を祝い，二晩にわたって，ホワイトホールの迎賓館（Banqueting House）で，ベン・ジョンソンの作品『ハイメンの仮面劇』（*Hymenaei*）が演じられた。イニゴ・ジョーンズの舞台装置による，巨額を投じた壮大なスペクタクルだった。この仮面劇の中では，若い二人が初夜の床を共にするのを待ち望んでいるように描かれているが，その夜，フランセスとエセックス伯は互いに引き離された。新婦は母親の世話に委ねられ，新郎は今までの教育を続ける手筈になっていた。

エセックス伯は当時の貴族の習慣に従って，これまでの教育を完成するために1607年から1609年初頭まで大陸を旅行した。そして，イギリスに帰国した年のクリスマス休暇後まもなく，再び宮廷に出入するようになった。彼はフランセスが，三年前の取り決めに従って，妻としてスタフォードシャー州チャートリーの自分の屋敷に来るように求めた。が，彼女はロンドンを離れるのを望まず，しばらくの間，別居を続けていた。しかし，1610年10月末頃（？），エセックス伯の強い要請のために，彼女は止む無く同意して，二人が同じ家に住むようになった。

だが，エセックス伯の不在中，フランセスの方は華やかさに欠ける夫に愛情を抱かず，彼女の心を捕えたのは，国王ジェームズの寵臣サー・ロバ

ート・カー（Sir Robert Carr, ?1585-1645）だった。この頃，フランセスが昵魂にしていた友人たちの中に，アン・ターナー（Anne Turner, 1576-1615）という30代半ばの金髪の未亡人がいた。ターナー夫人は，医師だった夫の死後，宮廷の若い男女に取り入って，彼らの愚行や悪徳を餌食にして暮らす寄生的な存在だった。彼女はサイモン・フォーマン（Simon Forman, 1552-1611）という著名な占い師（cunning man）と親しくしていて，宮廷のゴシップを彼に提供し，その仕事を助けていた。フォーマンはターナー夫人から情報を得ていたので，魔除けなどをもらいに来る宮廷人たちの相談に応えるのが容易だった。ずばり悩みを言い当てて顧客を驚かせ，盲信的な崇拝者にしてしまうのである。

良識ある人間なら，付き合うのをためらったであろうが，フランセスはことのほかこの二人を人生の相談相手として重用し誰よりも頼りにしていた。彼女は夫エセックス伯が自分との関係を結べないようにするためのまじないをフォーマンから授けてもらった。（このエピソードは，後述するように，ミドルトンの作品の中に反映されている。帰還兵セバスチャンが，魔女ヘカテから「次の世代を絶やす」呪符をもらい，これが貴族アントニオに作用して，新婦イザベラとの結婚を完全なものにすることができないのである。）また，カーとの恋を実らせるための魔術や媚薬が，フォーマンによって彼女のために処方された。奇しくも魔術が効を奏したのか，エセックス伯の男性としての機能が不全になる反面，カーは彼女との恋のとりこになった。ターナー夫人は自分の家をフランセスとカーの密会の場に提供した。二人は1612年春までに，深い関係になっていたという。[5]

そのうちフランセスはエセックス伯との離婚を目論むようになり，大叔父ノーサンプトン伯ヘンリー・ハワード（Henry Howard, Earl of Northampton）や父親サフォーク伯に，ロバート・カーが自分との結婚を望んでいると打ち明け，政治的な解決策を見出すことに期待を寄せた。それだけではなく，彼女は，フォーマンによる魔術にも導きを求めた。だが，1611年9月のある日曜日，フォーマンは妻に自分が「こんどの木曜日に

死ぬ」ことを予言して，急にその日（9月8日）に亡くなった。[6] 彼の不慮の死はオカルト魔術の信奉者であるフランセスに大きな打撃になった。そこで，ターナー夫人が新たな占い師として彼女のために見つけたのが，メアリ・ウッズ（Mary Woods）という'wise woman'だった。フランセスはこの女占い師を信用していたが，彼女に高価な宝石類などを巻き上げられたことが発覚した。ウッズは投獄されたが，フランセスから夫との別れ話のことで相談を受けていたと証言したため，フランセスは離婚訴訟を進める上で，不利な立場に置かれることになった。

他方，1611年3月ロチェスター子爵（Viscount Rochester）の爵位を与えられたカーも，フランセスとの結婚を早く実現したいと思っていた。が，親友サー・トマス・オーヴァベリーは，「エセックス伯夫人は品性の芳しくない女だ。恋愛の相手にはいいが，配偶者にするのは好ましくない」と言って，この結婚に不賛成だった。今までのカーにとって，オーヴァベリーは公私を問わず一等信頼できる友人だった。フランセス宛の恋文を書いたのも，オーヴァベリーだったと言われている。カーはこれまで忠実に彼の助言に従ってきたのであるが，この時はフランセスとの将来の生活を思い描いていたので，それを阻止するような彼の言い草が面白くなかった。

さらに1613年3月，二人は激しく言い争い，絶交するには到らなかったものの，長年の友情に致命的な亀裂が生じた。やがて，ゴシップを漁る宮廷関係者たちに電撃的な知らせが広がった。4月21日，オーヴァベリーがロンドン塔に護送され幽閉された，というのである。表向きの理由は，彼が大使として海外赴任するように国王から何度も要請されたにもかかわらず，それを頑なに拒否したことが不敬罪に当たる，ということだった。

この間，フランセスとエセックス伯の離婚訴訟は1610年頃に始まったが，1613年には法律上の認可をめぐって，世間の耳目を集めるようになった。国王ジェームズの説得にもかかわらず，カンタベリー大主教ジョージ・アボットは，宗教的な観点から最も強固に反対意見を陳述した。国王は政治的な配慮のもとに，離婚を法的に認めさせるために，魔術に関する

自分の理論――相手次第で男性が不能になるのは，魔術の影響力が大きいという考え――の支持者たちを予め審議会メンバーに選んでおいた。9月25日，12人の委員から成る審議会は，賛成7，反対5で，最終的な判決としてエセックス伯とフランセスの結婚の無効を言い渡した。

こうしてハワード家の勝利は確定したが，この判決が覆される可能性が全くないわけではなかった。それはエセックス伯やアボットなどの対立勢力がオーヴァベリーを抱き込んで，新たな運動を開始するかもしれないからである。ところが，そのオーヴァベリーは判決の下りる十日前，9月15日，すでにロンドン塔の独房で謎の死を遂げていたのである。[7]

1613年11月14日，ロバート・カーは国王の更なる寵愛に恵まれ，サマセット伯（Earl of Somerset）という称号を与えられた。そして12月26日，チャペル・ロイヤルで，カーとフランセスの華彩な結婚式が挙げられた。連日連夜，この結婚を祝う大掛かりな饗宴が催され，トマス・キャンピオンやベン・ジョンソンの筆になる新たな仮面劇が上演された。サマセット伯とハワード家の幸福を嫉んで，これを奪うような嫉妬，敵意，恨みが入り込む余地は宮廷のどこにも潜んでいないように思われた。

しかし，1615年9月，ロンドン塔の看守リチャード・ウェストンが逮捕され，「オーヴァベリーの亡霊」による罪状告発が，カーとフランセスを苦しめることになる。ターナー夫人の家僕だったウェストンを看守という職務に推薦したのはフランセスであり，夫妻がオーヴァベリー殺害に関与していたのではないか，という疑惑が生じたのだった。1615-16年の裁判のなかで，フランセスを含む被告たちは，ウェストンの息子ウィリアムを使い走りとして毒入りの菓子などを差入れし，オーヴァベリーの暗殺を企んだことを認めるに到った。

ミドルトンがこうしたフランセスの離婚と再婚に取材して，『魔女』を書いたことは明白である。作品が閑却されるようになったのは，検閲によって上演が困難になったことに一因があると考えられている。[8]

III.『魔女』の主筋

この劇は①婚約者だったイザベラ（Isabella）を取り戻そうとするセバスチャン（Sebastian）の計画，②貴族アントニオ（Antonio）とイザベラという新婚夫婦の関係，③アントニオと娼婦フロリダ（Florida）の性的な関係，④アントニオの妹フランシスカ（Francisca）と紳士アバーゼインズ（Aberzanes）の関係，⑤大公（Duke）に対する大公妃（Duchess）の復讐心――などが錯合している。この中の①と②で構成される主筋では，イザベラとアントニオの結婚にもかかわらず，セバスチャンが，かつてイザベラと交わした結婚の誓いを貫こうとする。副筋である⑤は，祝宴の朝食での儀式的な飲酒によって導入される。大公妃は夫に討ち取られた自分の父親の頭蓋骨を酒盃として夫から乾杯を強いられることに対して憤り，夫への復讐心を抱く。脇筋となる④では，フランシスカの妊娠と関連して，お産のための尾骨麻酔薬，田舎への泥だらけの旅行など，ミドルトンの市民喜劇を想わせる場面を提供する。また，この後に出てくる魔女たちが緊張緩和の挿話を提供し，劇全体は複合的な筋に基づく多層構造を形成している。魔女たちは，①②⑤に関係しているが，その他の筋には関与していない。

舞台はアドリア海から８キロ，イタリア北東部の都市ラヴェンナ。

劇の主筋は１幕１場の冒頭，性急な結婚式の祝宴を背景に，セバスチャンが，友人フェルナンド（Fernando）に不平不満を聞かせることで始まる。3年前に，セバスチャンは，意中の女性イザベラと結婚の誓いを交わして戦争に赴いたが，戦場から帰ってきたその日に，彼女がアントニオのもとへ嫁いだことを知ったのだった。「不当な扱いを受けた愛は，心に深い傷を負わせる」（‘Wrongs done to love / Strike the heart deeply;’ I, i, 25-26, 下線・筆者，以下同じ）とフェルナンドは同情する。

同２場で，セバスチャンはイザベラとの関係を回復するために，魔女ヘカテ（Hecate）の助けを借りることにする。彼はヘカテやその仲間スタド

リン（Stadlin），ホッポー（Hoppo），ヘカテの息子で道化ファイアストーン（Firestone）たちの住処にやって来て，「新婚の二人――アントニオとイザベラが別れるように仕向ける魔法はあるか」と尋ねる。「結婚の床を分かつことはできないが，不和・嫉妬・争いを生じることはできる」とヘカテは答える。セバスチャンはそのまじないの品として，「日没後に絞首刑にされた男の陰茎」と同じ効力を持つ「蛇の皮」を与えられる。

2幕1場では，アントニオが憂鬱そうな顔をしている。イザベラとの初夜は，不首尾に終わった様子である。彼は精力増強のために，二羽の雄鶏と半オンスの真珠を取り寄せるように，家僕ガスペロ（Gaspero）に命じる。

シーリオ（Celio）に扮装したセバスチャンが，スコットランドからの使いの紳士と共に入場。シーリオは，アントニオの承諾を得て，イザベラに仕えることになる。　セバスチャンは，「アントニオが性的に不能で，まだイザベラは処女のままのようだが，彼女を自分のものにするまでは安心できない」と独白。その屋敷でフロリダを見かけたセバスチャンは，「あれは，どういう女なんだ」とガスペロに聞く。「主人のアントニオが，ラトニーに囲っている高級娼婦ですよ」と彼は答える。

3幕に入って，アントニオは妹フランシスカの助言に従って，イザベラの浮気の証拠をつかむために，2週間ほど家を留守にすることに決める。イザベラには，「公務のため不在になる」と知らせる。

召使シーリオに変装したセバスチャンは，これを聞いて好機到来とばかり，イザベラに接近する。「奥様，あなたは人が好くて，だまされておいでです」（‘that goodness in you <u>is abused</u> madam.’ III, ii, 185）「ご主人は，情婦に会いに，カントリー・ハウスに出向かれたのです。今夜，浮気の現場を押さえることができます」「知らぬが仏と思われて，損をするのは奥様ご自身ですよ」（‘Be not too confident <u>to your own abuse</u> madam.’ 197）と申し出る。イザベラが信用しないので，シーリオはことばを続ける。「召使いがご婦人方にあまりにも敬意を払い，忠誠を尽くすのは間違いだ

ということが分かりました」（'I perceive now / Too much respect and faithfulness to ladies / May be a wrong to servants.' 204-5）。そこまで言われて，イザベラは彼の計画に従うことに同意する。

4幕はフェルナンドの屋敷が舞台。まず，セバスチャンは友人の助力を得て，自分の計画を進めることが，「信頼や友情にもとるものではない」と説いて，フェルナンドの理解を求める（'Then you best understand, of all men living, / This is no wrong I offer, no abuse / Either to faith or friendship . . .' IV, ii, 6-8）。そして彼はまずここへ呼び出したフロリダに会って，彼女がアントニオ邸のイザベラの寝室に，庭側から入るための鍵を手渡す。程なく，イザベラがドアをノックする。「アントニオがここに来ているはずですが」と彼女はフェルナンドに尋ねる。イザベラは屋敷に入ったとき，フロリダの姿を見かけたので，夫への不信感を抱いている。

「あなたは奥方様ではないでしょうね」とフェルナンドは聞く。

「いえ，わたしはアントニオの妻ですよ。」

「これは驚いた。」フェルナンドは，「すると，さっきの女は何者なんだ」という疑いをほのめかし，「自分の家が，いかがわしい目的に利用されるのは困る」という。

「あなたにご迷惑をお掛けしたり，お宅様の評判を悪くしたりするはずがありませんわ。どうか主人のいるところへご案内ください」（'Why do you think I'd wrong / You or the reputation of your house? / Pray show me the way to him.' 87-89）とイザベラは懇願する。

しかし，寝室には，アントニオもその情婦フロリダの姿も見えない。シーリオを装うセバスチャンは，ここでイザベラを襲うことができる。しかし，「彼女にまず純潔を誓わせておきながら，最初におれが［従僕のシーリオとして］陵辱するのは，男らしいやり方とは言えない」（'Were it in me a part of manly justice, / That have sought strange, hard means to keep her chaste / To her first vow, and I t'abuse her first?' 98-101）と思い直す。

「誰もいないじゃないの」とイザベラが彼に抗議すると，

「まだこれからです。夜が更けるまでお待ち下さい」とシーリオのセバスチャンは答える。

その頃，アントニオは自分の屋敷に戻る。フランシスカはノックの音を聞いて，自分では扉を開けようとせず，いびきをかいて寝ているガスペロをたたき起こす。「ご主人様が帰ってきたのに，誰も迎えに出る者がいないなんて。お前，早く行って，あけなさい」とせかす。彼は服を着る間もなく，飛び出していく。

アントニオが入ってくると，フランシスカは彼に，すぐにガスペロの寝室を調べるように示唆する。ベッドは乱れていて，ガスペロはいない。アントニオは，妻とガスペロの不義の証拠を見たと思い込み，「信頼を裏切られた」（'Oh abused confidence!' IV, iii, 37）と叫ぶ。

アントニオはいきなり刀を抜き放つと，イザベラの寝室に駆け込み，そこにいたフロリダをイザベラと間違えて，ガスペロと共に刺してしまう。だが，妻の不貞が表沙汰になると，自分の恥辱になる。そのため「このことが念頭を去らず，重荷が取り除かれることがない」と嘆く（'I feel no ease; the burden's not yet off / So long as th' abuse sticks in my knowledge. / Oh 'tis a pain of hell to know one's shame'. 51-53）。

世間体を気にするアントニオは，秘密を知っている妹も殺害しようとする。フランシスカはあわてて，「お兄様のベッドが不倫のために使われたことはありません」と声を挙げる。

FRANCISCA　Bless me but with life, I'll tell you all.
　Your bed was never wronged.
ANTONIO　　What! Never wronged?
　　(78-80)

イザベラの浮気というのは自分の醜聞を逃れるための作り話で，実は自分がアバーゼインズとの間に子どもをもうけたこと，時間かせぎのために母親からの呼び出し状を受け取ったように仕組んだこと――などについて

フランシスカは打ち明ける。

そこでアントニオは，アバーゼインズを呼び出して，即座に決闘を申し込む。相手が応じないのを見て，一転，妹との婚約を誓わせる。アントニオは，二人には無害のワインを飲ませ，自分は毒入りのワインを飲む。そしてアントニオは，セバスチャンとイザベラの結婚の神聖な誓いに反して，自分がイザベラを娶ったことで自責の念にさいなまれていた気持ちを吐露する（'I see now / 'Tis a thing dreadful t'abuse holy vows / And falls most weighty.' V, i, 66-68）。

従僕ハーミオ（Hermio）が現われ，アントニオが刺した二人は負傷しただけで，死んだわけではないと明らかにする。そして，刺された女はイザベラではなくフロリダであり，アントニオが飲んだのは毒入りのワインではなく，害のない飲物であることが分かる。「薬のことでは，心配ご無用です。お健やかなことは，お生まれになったときと同じくらいです」（'Let not conceit abuse you; you're as healthful, / For any drug, as life as yet ever found you.' 86-87）。

劇は急速度で進行し，まず市長（Lord Governor）がアントニオの屋敷を訪れる。次に深手を負ったフロリダが倒れ込む。彼女はイザベラがフェルナンドの館で，シーリオと共に夜を過ごしていると告げる。アントニオは妻への新たな疑いに捕えられ，復讐心に駆り立てられて，二人を見つけに走り出していく。

市長は静観することにする。「姪イザベラに罪があるなら，弁じ立てることはあるまい。罪がなければ，神の加護があるだろう」（'I'll not speak / To have her spared if she be base and guilty. / If otherwise, heaven will not see her wronged;' 107-109）。

5幕3場で，劇は大団円を迎える。市長，イザベラ，フロリダ，フランシスカ，アバーゼインズ，ガスペロ，シーリオのセバスチャンなどが集まる。

その場で，イザベラは訴える。「わたしが無実の罪を着せられたことは，この女［フランシスカ］のせいだということは明白です」（'My wrongs

being so apparent in this woman — / A creature that robs wedlock of all comfort / Where'er she fastens . . .' V, iii, 1-5)。そして，アントニオの軽挙妄動が明らかになる。

「こいつは奇妙だ。アントニオは間違ったことをしていながら，復讐を求めるとは」（'This is strange, / That he should give the wrongs yet seek revenge.' 9-10）と市長は合点がいかない。

そこへハーミアが駆け込んできて，アントニオが突然の事故で亡くなったことを報告する。アントニオはフェルナンドの館に怒り狂って闖入するが，誤って隠し戸から底深い地下牢に落ち込んでしまったのである。

市長「欲情の種よ，不正と誤った復讐心は，なんという恐怖を哀れな奴にもたらすことか。そいつがいささかも予期していない時に。」

イザベラ「主人のことは，もういいわ。あの人のどんな悪いことも。かわいそうだと思うだけ。」

GOVERNOR Oh you seed of lust,
Wrongs and revenges wrongful, with what terrors
You do present yourselves to wretched man
When his soul least expects you!
ISABELLA I forgive him [Antonio]
All his wrongs now and sign it with my pity.
(V, iii, 33-38)

フロリダは，アントニオの急死という知らせを聞いて気を失う。

ここでセバスチャンはシーリオの偽装を取り去って，市長たちを驚かせる，「わたしも，ずいぶんひどい目に合いました」（'The same, much wronged, sir.' 44)。その場にいた者は，誰も自分の目を信じられなかった

が，この瞬間，イザベラは喜びの声を挙げる。セバスチャンは，「もう職業としては召使ではないが，これからも，あなたに仕える僕(しもべ)であることに変わりはありません」と彼女に愛を誓う。ガスペロの偽証でセバスチャンは亡くなったと思われていたのだが，こうして事実が判明し，皆も二人を祝福する。

『魔女』の主筋は以上である。事件の発端は，セバスチャンが婚約者を奪われたことであり，友人フェルナンドはそれを「愛に対する不当な仕打ち」（'Wrongs done to love,' I, i, 25）と表現している。この原因を作り出した人物アントニオは，自らその非を認めている（V, i, 66-68）。が，彼は妻が不貞を犯したと勝手に思い込み，その「悪い行為」を許容できず，復讐しようとして自分で墓穴を掘ることになる。主筋の最後で，シーリオは仮装を脱ぎ取って，本来の姿であるセバスチャンに戻る。彼は今までの自分に対する「不当な扱い」（V, iii, 44）が終わったことを喜び，安堵の気持ちを述べる。この間に，'wrong'や'abuse'という不正，不義，誤謬，悪用などを意味することばが繰り返し用いられており，作中人物がお互いに信用できない関係にあることを示している。

約言すれば，主筋は間違った結婚の祝宴で始まり，正当な結婚の予告に終わる。それが作中人物の台詞の中では，'wrong'の指摘で始まり，'wrong'の是正に終わることばとして表現されているのである。

II. 副筋

次に大公妃を中心とする副筋について考えてみることにしたい。

1幕1場で，大公の屋敷では， 前夜からの婚礼を祝う宴がまだ続いている。やがて大公，大公妃，市長，花婿アントニオ，花嫁イザベラ（市長の姪），フランシスカ（アントニオの妹）が舞台に登場。大公は祝宴の続きとして，杯を一巡させるが，その杯はかつて自分と戦って敗れた義父の髑

髏である。アントニオは婚礼の席にふさわしくないものを差し出され，不吉な予感がする。

大公妃は亡き父がこのように辱められるのを何度も経験し，夫に対して反発を強め，嫌悪感を抱く。

そこで彼女は，アルマキルデス（Almachildes）――小間使いのアモレッタ（Amoretta）に想いを寄せている紳士――を使って，夫の殺害を計画する。アモレッタはアルマキルデスが嫌いで，将来の自分の結婚を考え，この男との交際のために世間の評価が下がることを好まない（II, ii, 132）。しかし，女主人に言われた通り，求愛を受け入れる振りをして彼を寝室に誘う。

翌朝，目隠しをされたアルマキルデスが，「あんたは処女だったはずだが，男をだますようにうまく嘘をついていたんだな。あんたとの結婚を予定していたのに。おれはうまく担がれていた，というわけか」とアモレッタを相手にしているつもりでしゃべっている。目隠しを取られてみると，目の前にいるのは，大公妃。前夜，アルマキルデスが関係を持ったのはアモレッタではなく，同妃だったのかと思い至る。

「大公を殺すか，自分が死ぬか，どちらかを選ぶように」と大公妃は，彼に命じる。「大公を殺せば，あなたと正式に結婚する」と大公妃に言われ，アルマキルデスは，仕方なく同意する（3幕1場）。

4幕1場に入って，アルマキルデスが登場。「大公を片付けたあとは，おれが殺られることになりそうだ。女の誘惑には用心しなければ……。それに民衆は自分たちの中から，新しい大公を選出したいと騒いでいる」と独語し，大公妃の「節操」（‘honesty,’ IV, i, 9–10）を疑う。

案の定，大公妃は，夫の殺人に関する証拠隠滅のために，今度はアルマキルデスを葬り去ろうとする。そして，権力者の庇護のもとで安逸な生活を送るために，市長との結婚を思い描いている。うまい具合に市長が来訪し，大公妃は夫を喪ったこと，そして民衆の蜂起で途方に暮れていることで市長の同情心に訴え，彼の愛欲を掻き立てることにも成功する。

彼女はアルマキルデスが邪魔になったので，魔女ヘカテの助言を得て，彼の息の根を止めてやろうと思う（'I'll take some witch's counsel for his end, / That will be sur'st. Mischief is mischief's friend.' IV, i, 94-95）。

劇の結末近くで，大公妃が登場。彼女はアルマキルデスがすでに魔術で殺された，と思っている。市長は彼女に求婚の抱擁をすると見せかけて，とつぜんそれを止める。

そのとき，亡骸のように見える大公の身体が発見される。

市長「大公はあなたの手に掛かったのだ。」
大公妃「では，甘んじて死を受けましょう，あなたの剣で。」
市長「姦通を犯した女の血で，わたしの剣を汚すことはできない。」
大公妃「夫の流血は，わたしのせいですが，姦淫の罪は犯していません。」

それでアルマキルデスが呼ばれ，大公妃との関係を証言する。

ところが，「目隠しされたアルマキルデスが関係を結んだのは，雇われた娼婦です」とアモレッタが説明し，大公妃の汚名はそそがれる。大公妃が犯したのは，夫を殺した罪だけだということになる。

しかし，大公は殺されたわけではなかった。（アルマキルデスは大公を亡き者にしたと偽って，大公や市長に大公妃の企みを打ち明けたのだった。）ここで，今まで死んだ振りをしていた大公が立ち上がり，夫人と和解。この日が「勝利，喜び，真実の愛の日」となったことを述べて，劇が幕を閉じる。

このような副筋における事件を展開させる主なモチーフは，大公が義父の髑髏を酒盃として用いるという'abuse'である。本来，埋葬されて土のなかに眠っているはずのものを祝宴の席に持ち出し，アルコール飲料を入れる道具として使うなどというのは悪趣味であり，常識の範囲を超えた骸骨

の悪用であり誤用である。劇の最後で，「亡き父の受けた傷は，わたしの復讐に値するほどのことではありませんでした」（'His injury was too low for my revenge.' V, iii, 91）と大公妃は自分の罪を認めるが，大公の行為は死者の人格権を著しく損うという意味で咎むべきであり，彼女が夫に反感を持ったのも納得できないわけではない。

しかし，大公妃が復讐を遂行するにあたって用いる手段は，自分のジェンダーに基づく手練手管であり，セクシャルな'abuse'であって，道徳的に到底許されることではない。彼女はアモレッタに命じてアルマキルデスを誘い込み，アルマキルデスに肉体関係が生じたと思い込ませて夫殺しを使嗾する。それが成功したという報告を受けると，今度は権力者による保護を求めて市長との結婚を求める。そのため，アルマキルデスが障害になるので，魔女ヘカテに魔術で彼を死に到らせるように頼み込む（V, ii）。最後に，大公が生きていることが分かり，大公妃は暗殺を企てたことを認める。彼女は姦淫については潔白を主張するが，肉欲を餌に男たちを'manipulate'し利用しているのであって，性欲を'abuse'するやり方に，彼女自身の魔女的な性格が現われている。

III. 脇筋

次にアントニオの妹フランシスカとその情夫アバーゼインズを中心とする脇筋について考えてみよう。

まず，フランシスカの性的な放縦が明らかになるのは，先述の1幕1場で，大公が髑髏の盃を一巡させる場面での独白である。彼女は妊娠していることを知られないように，本当は飲みたくない酒を飲むことにする。2幕の傍白で，彼女が，ある夜，男友達と共寝して，すぐ妊娠してしまい，そのために悩んでいることが明らかになる。「恋人はわたしが，評判を落とさないでいられるように，うまい方法を考えると言ったけれど」（'My friend promised me / To provide safely for me and devise / A means to save

my credit here i'th'house.' II, i, 57-58)。

イザベラはそんなフランシスカに，「結婚できてよかった」とその功徳を説き（'I'm for the married life; I must praise that now.' II, i, 68-69)，夫アントニオの自慢話をする。そして，「お互いに共通の話ができるように，あなたも早く結婚しなさい」と勧める。アントニオが登場したあと，フランシスカの情夫アバーゼインズと従者が，食べ物の袋やワインやクラレットのボトルを携えてやって来るが，アントニオはアバーゼインズが気に入らない。

そこへスコットランドから来たと称する紳士が，アントニオの母親からの手紙を持参し，「すぐにフランシスカを寄越すように」との用命を伝える。フランシスカは「行きたくないけれど，お母さんの言うことだから，仕方がないわ」と旅仕度をする。

2幕3場。アバーゼインズと赤ん坊を抱えた老女が登場。赤ん坊はフランシスカが分娩したばかりの子どもである。アバーゼインズは赤ん坊を老女に託して，秘密の屋敷に連れ去るように指示する。フランシスカはスコットランドの母親の家に行っていたことにして，ひそかにこの赤ん坊を産んだのだった。彼女はスコットランドから馬で帰ってきた振りをして，兄アントニオのところへ戻ることにする。

その間に，イザベラはアバーゼインズとフランシスカの内密の関係をうかがわせる手紙を見つけ，義妹のやり方に腹を立てている。その時，フランシスカがスコットランドから戻ってきたという。母親が自分に会わせようとしていた紳士が，ある結婚式の披露宴で過食のために急逝し，会うことなく帰ってきたと彼女は説明する。

イザベラはすでにその嘘に気づいており，「この筆跡が誰のものか，分かるはずよ」と彼女に手紙を見せる。イザベラはフランシスカが「兄の家をうまく利用し，信頼に付け込んでいる」ことを憤る（'She . . . / Abused her brother's house and his good confidence.' III, ii, 55-57)。「良心にそむいて，わたしたちを裏切ったり，あんなにいいお兄様やあなたに対して

抱いているわたしたち二人の気持ちを損なうなんて，ひどいことだわ」（''Twas ill done to abuse yourself and us, / To wrong so good a brother and the thoughts / That we both held of you.' 97-99）。そして，「アントニオには，何も言わないことにするから，アバーゼインズと別れなさい。さもないと，わたしはあなたの敵になるでしょう」と告げる。

フランシスカは兄にこの秘密を知られるのを恐れ，注意を逸らすために，イザベラの貞操に疑問を抱かせるための計略を思いつく。彼女は，兄と二人きりになったときに訴える。

「わたしもお兄様が選んだ方は好きよ。でも，あの方がお兄様に悪いことをしているのに，黙っていられるかしら。これは兄妹の愛情として言うのよ」（'I love her as a woman you made choice of — / But when she wrongs you, natural love is touched, brother, / And that will speak, you know.' III, ii, 148-51）。「でも，家に姉妹や母親や近親者がいるかぎり，若い嫁が夫に内緒で悪いことなんかできないわ」（'It is not possible / A young wife can abuse a husband then;' 161-62）。

その後の事件の経過については，主筋との関連で述べた通りである。フランシスカは，世間体を案じるアントニオによって殺されそうになり，本当のことを告白する。つまり，イザベラの不貞は捏造であり，婚姻外の交際を楽しんでいたのは自分の方だった，と（4幕3場）。そこで，アントニオはアバーゼインズを呼び，妹との結婚を誓わせる（5幕1場）。

このように脇筋では，結婚制度という枠内の性とそこから逸脱した欲望が対比されている。イザベラはアントニオと結婚しながら，夫との間に性的な関係がなく，フランシスカの方は婚前の性を経験しながら，それを隠すことに努めている。前者が後者に結婚の歓びを説いて聞かせるのはアイロニックであり，観客にはイザベラのことばが自分の感情を偽った空疎な台詞であることが伝わるので，イザベラに対しても単純に共感することはできないのである。

この脇筋でも，性的な欲望に支配されながら，それを隠蔽し，他者の無

知や善意に突け入るやり方を非難して，‘abuse’や‘wrong’ということばが用いられている。フランシスカとイザベラは，お互いにそのようなことばを用いて相手を咎める。このような応酬の中で，イザベラは，義妹の道徳的な過誤が明るみに出ないように配慮する点で寛容である。これ対して，フランシスカは彼女の善意を悪用し，罪を彼女に着せることで，自分の名誉（honour）を守ろうとするのだから，きわめて性悪である。アントニオは妹の虚言に惑わされ，妻の醜聞が広がることを恐れて，妹を刺殺するという法外な行為を取ろうとする。彼は世間の評判を心配する余り，人間的な感情を埋没させ，敢えて不当な手段を辞さず，保身をはかる宮廷人の酷薄な一面を表わしている。

IV. 魔女たち

(1) 挿話的な役割

最初に魔女の巣窟を訪れるのは，セバスチャンである。彼は自分がまともな判断力を失っていることを自覚しており，魔女の助言を求めるのが敬虔なキリスト教徒のすることではない，と思っている。が，自己嫌悪を感じながらも，恋の迷路をさ迷う者にはそれ以外に解決策がない，とその恥ずべき行為を正当化する。

やれやれ，この忌まわしい場所に入るのは，
なんとも気が進まなくて嫌だ。しかし，こんなひどい
　　扱いを受けた恋のためなら，
キリストの教えに反することも敢えてする。おれは病める心のため
　　に死に到る
数限りない人間どもと同じような運命を辿ることになるのだろう。
だが，避けて通るわけにはいかない。
Heaven knows with what unwillingness and hate

I enter this damned place — but such extremes
Of wrongs in love fight 'gainst religious knowledge,
That were I led by this disease to deaths
As numberless as creatures that must die,
I could not shun the way.

(I, ii, 107-12)

問題はセバスチャンが，恋の成就を不当に妨げられたとしても，それに対して道徳的に許容される手段で対処するのではなく，魔女の属性である憎悪，破壊，呪詛という負性のエネルギーを利用することである。つまり，彼は良心に基づいて選択し得るはずの自分のメンタリティを「誤用」（'abuse'）しており，観客は嫉妬と復讐心に根差す彼の「正義の論理」を必ずしも支持し得ないことになる。しかし，彼の考えでは，自分が確保したはずの結婚の誓約を反故にして，アントニオの意志を受け入れた世間は間違っており，どんな手段を弄してもこの状態を是正しなければならないのである。

セバスチャンが去った後，もう一人の客，派手な装いのアルマキルデスが酩酊状態で，恋のお守りをもらいに来る。彼は，大公妃の小間使いアモレッタの気を引こうとして失敗したのだった。彼はお守りを与えられた後，魔女たちの饗宴に招待される。

次にヘカテたちが登場するのは，3幕3場。月が煌煌と輝き，雑木林で梟の鳴き声が聞こえる夜，魔女たちは空中飛行に出掛ける。ファイアストーンは，「今夜，死者が出そうだ」（'If we have not mortality after it, I'll be hanged,'）と予測する。「というのも，ふしだらな女たちは空気を腐敗させ，あたり一帯を汚染させるからだ」（'for they are able to putrefy it, to infect a whole region.' III, iii, 17-19）。

さらに舞台が転じて，5幕2場。ヘカテの住処には大鍋が据え付けてある。すでに副筋との関連で見たように，大公妃がアルマキルデスを屠り去

る術策を求めてやって来る。彼女は一カ月でやっつけられる魔法があると聞かされる。が，彼女が「今夜すぐに片付けたい」というと，ヘカテは「では，わたしに任せなさい」とその要望を聞き入れる。魔女たちは彼女が去った後，大鍋に呪術のための雑多な'ingredients'を投げ込んで掻き混ぜる。そしてそれが終わると，無気味な歌をうたって踊りながら退場する。

(2) 悪の強調

ヘカテは「彼方より作用を及ぼす者」を意味するギリシャ神話の女神であり，ティタン族の娘との説もある。富，知恵，勝利などの恵みをもたらすとされる。が，夜には亡霊や悪魔を地上に解き放ち，死者の霊魂と共に彷徨するという。死者の魂の支配者として黒魔術，妖術，黄泉と関連づけられ，月と同一視されることもある。中世からルネッサンスにかけて，人々はヘカテを魔女たちすべての始祖だと信じた。そして，特別に厄介な魔術を仕掛けるときには，呪文でヘカテの霊を呼び出し，ヘカテの助力を求めることが必要だと考えた。[9] ミドルトンの作品には，このようなヘカテのイメージを窺うことができるが，伝統的には女神であるヘカテを人間として描いている。これは彼の知識不足によるものか，それとも先述のサイモン・フォーマンやメアリ・ウッズのような魔術に携わる錬金術士や女魔法使いなどとの類推で女神を人間化したもの，と思われる。

ミドルトンの作品のなかで，魔女たちの居住地域は不明であり，その背景として，ロンドンの情景がラヴェンナの環境に都合よくつなぎ合わされている。[10] その結果，魔術が作用する一貫した社会的な分脈を作り出す試みは見られず，大陸的なものとイギリス的なものが混ざり合っている。'Incubus'（夢魔）や'succubus'（女の悪魔）による一般市民たちへの性的な虐待，塗油による魔女たちの空中飛行などはヨーロッパ的である。一方，使い魔，ロウソクの人形や，「ビールの泡やミルク」を貸し与えてくれなかったことに対する報復として牛をびっこにするなどの類いは，イギリス

的な迷信・民間伝承に基づいていると言える。

ミドルトンは好奇心を掻き立て，劇的な効果を高めるために，これら魔女の場面を提示する際に独自の工夫を凝らしている。①最初に観客の注意が向けられるのは，ヘカテと助言を求めに来る人間たちとの取り引きである。ヘカテの使い魔である大きい猫が入場し，人間たちの宴会よりも奇抜な魔女たちの宴会が展開する。②音楽とスペクタクルを結合した舞台効果のなかで，魔女たちの演じる空中飛行は，ヘカテの魔術的なテクノロジーの成果として示される。③薬草を混ぜ合わせるヘカテの大鍋の致死的な効力が，最後の場面として残されており，シェイクスピアの『マクベス』の大鍋に先立つものとしてしばしば言及されるのはこの箇所である。

ラヴェンナの宮廷が魔術の世界と交渉を持つそのやり方によって，魔女の場面の雰囲気が観客に分明になり伝えられる。普通の人間と魔女たちとの交流が簡単に行われ，人間界は魔女たちによって淫猥な欲望充足の手段とみなされている。ヘカテはほかの人間がいないとき，無骨な息子ファイアストーンとの近親相姦で満足することを強いられる。

セバスチャンや大公妃などの客に対しては，その信用を得るために，魔術に関する知識を披露する機会がヘカテに与えられる。彼女は自分の権威を確立しながら，抜け目なくテレパシーの魔力を楽しむ。月の光に照らされて飛行のできる能力を喜び，音楽・ダンスを楽しむ様子も，ミドルトンの魔女として特徴的である。しかし，彼女が自分の能力の範囲を越えて魔術を施すことはできない。お守りはたいせつに扱われなければならず，ロウソクの人形による呪いを成功させるためには満月を必要とする。また，結婚に関して，ヘカテはその状態を解消させる能力が自分にないことを認めている。[11]

魔女たちの属性として，既述のように，空気を汚染させ事物を腐敗させる能力のあることが語られているが，ヘカテたちはラヴェンナにおける退廃と並行しており，市民社会における節度のない性的な欲求を悪の強調点として際立たせている。魔女たちは快楽の追求に関して貪欲であり，その

'hedonism'は人間の欲望を誇張し歪曲した形態となっており，宮廷のパロディとして作用している。魔女たちと宮廷人たちに共通しているのは不健全な性的欲求であり，それがこの劇の主要な関心事になっている。しかし，魔女たちは「いたずら」（'mischief,' I, ii, 180）それ自体を楽しんでいるだけで悪意がなく，一般の人間たちよりも無邪気である。例えば，ファイアストーンが，夢魔（Nightmare）との無軌道な遊びに出かける箇所（I. ii. 94-104）なども，喜劇的な印象を与える。宮廷人は偽善的であり，相手に知られず，ポーカーフェスで邪悪な意図を実行するのだから，彼らの方が魔女たちよりも性質が悪いということになる。

(3) ベン・ジョンソンの作品との比較

ミドルトンの魔女ヘカテは，ベン・ジョンソンの『女王たちの仮面劇』（*The Masque of Queens*, 1609）に登場する女神ヘカテに示唆されたもの，と考えられている。ジョンソンの作品では，魔女たちを導く者として選ばれたヘカテは人間ではなく女神である。また，魔女たちが直接人間と交渉することはなく，ジョンソンの方が神話的な伝統に忠実である。

ジョンソンの仮面劇では，魔女たちは社会の調和を破壊し，無秩序の状態を作り出す。女親分（Dame）と 11 人の魔女たち（witches）は，幕間狂言（anti-masque）で活躍し，本来の正・仮面劇を引き立てる「虚偽の仮面劇」という位置を占めており，悪徳や無知と関連づけられて，異様な場面を演じる。『女王たちの仮面劇』の基本的な主題は美徳の勝利であり，ジョンソンにとって，美徳とは知識のことである。魔女たちに象徴される悪徳・愚昧に対して，12 人の女王たちの美徳・知識が打ち勝つ。ジョンソンの仮面劇はすべてルネッサンス・ヒューマニズムの精神に満ちており，古典の学問・価値の保持が最も重要視されている。というのも，彼はルネッサンスの基本的な規範——個人と国家双方における調和・秩序を称揚したからである。

ジョンソンの作品の中で，魔女たち（witches）は，二重の性格を持っている。一つは，Dame（女親分），すなわち Ate（女神アテ）の分身や Mischief（災い）などがその集団を先導する，魔女としての本来の性格である。もう一つは「真実の名声」（True Fame）の敵対者としての属性であり，無知，疑い，信じやすさ，虚偽，不平，悪意，横柄，中傷，罵倒，悲痛，陵辱などの破壊的な性格である。[12]

魔女たちは調和の取れた社会を狂わせ，混乱をもたらすが，それはルネッサンスの精神が最も恐れた悪政（misrule）の一つの典型である。〈女親分〉は，国王ジェームズの平和外交に暗に言及し，「穏やかな平和の成果を見るのはいやだ」（132）と為政者に抵抗する姿勢を見せる。[13]　〈女親分〉は社会を混乱に陥れるために薬草を作り，魔法の呪文を唱える。それでも効力が現われないので，魔法を生み出すためのダンスを始める。彼女たちのグロテスクなその踊りは正・仮面劇の優美なダンスと対照的である。

このように正・仮面劇は光として表現される美徳・知識と結びつけられるのに対して，魔女たちによる幕間狂言は暗闇を支配する悪徳・無知と連関性を持っている。[14]　そのため魔女たちは，夜行性の動物や魔術の儀式に使われる薬草によって，闇の雰囲気を強化している。他方，名声・美徳の勝利は，音楽や光の奔出によって特徴づけられ，名声は黄金の翼，黄金の襟を備えている。[15]

ここでシェイクスピアの『マクベス』に付言すると，King's Men はミドルトンの『魔女たち』を上演したあと，好評を博した要素を『マクベス』に部分的に取り入れたという仮説もある。『マクベス』2 幕 1 場および 3 幕 2 場で言及されているが，3 幕 5 場で，不意にヘカテが現われるのはそのためだという。ともあれ，魔女たちが薬草を集める場面に関して，『マクベス』では月食の完全な暗闇が支配しているのに対して，ミドルトンの作品では月明かりの中で行われる。前者の方には凄味があり，後者よりも毒性と悪意が強化されている。また，ミドルトンの作品では，人間が自分で

行為を選択したあとで魔女たちに相談するが，シェイクスピアのマクベスは，魔女たちによって選ばれた犠牲者なのである。[16]

V.『魔女』と実在の人物

作品の舞台はイタリアのラヴェンナに設定されているが，実質的にはジャコビアンの宮廷生活を描写している。このような背景のなかで，実在の人物と作中人物との間にはどのような照応が見られるだろうか。セバスチャンが帰国してみると，許嫁を別の男に奪われていたというのは，現実の出来事としては，エセックス伯が大陸旅行から帰ってくると，フランセスがロバート・カーと恋仲になっていたことを髣髴させる。しかし，この箇所を除くと，セバスチャンは，既婚夫人であるイザベラとの恋を実らせて最終的には彼女を娶るのであり，彼にはエセックス伯ではなくカーが投影されている。これに対して作中のアントニオは，イザベラとの関係でエセックス伯に似通うところが顕著である。

作品では，セバスチャンは「神聖な誓約が二人の魂の結びつきを認めた」(II, 1, 222) と主張しており，イザベラと自分がお互いに真実の愛によって結ばれていると思っている。[19] 他方，従僕ガスペロがいうように，アントニオは「評判のために結婚する」(I, I, 54) のであり，彼の結婚の動機には不純な要素が含まれており，神聖な愛を「歪める」 — 'abuse'する — ことになる。これはサフォーク伯とエセックス伯の両家が，本人たちの愛情の問題について十分に考慮せず，愛情よりも地位・収入・名声などを重視したこと，そのため悲劇的な事態を引き起こすに到ったことを想起させる。フランセスは親たちの結婚の取り決めを承諾するが，年月が経って，その制約がカーとの関係を妨げている，と不満を抱くようになる。社会的な拘束のために，「愛が歪められている」と彼女が感じたとしても無理ではないかもしれないのである。

フランセスはエセックス伯の性的な接触を拒むため，あらゆる手段を取

った。ターナー夫人と共に占星術師フォーマンを訪れ，夫との関係を絶つためにまじないや薬草の処方を受けたとされる。エセックス伯の寝巻きには，フランセスの召使いによって樟脳や生殖能力を弱めるための薬品が沁みこませてあったという。「フランセスたちは，蝋でできた人形を作り，葉をつけた小枝からとげを抜き取って，その人形の股間にそれを刺し，まじないが効くようにした」。[20] 作品では，このことへの言及が，セバスチャンがヘカテから，アントニオの性的な能力を衰弱させる呪符を受け取り，そのためアントニオはイザベラとの性的交渉を持つことができない，となっている。[21]

また，作品では，ヘカテは大公妃の要望に応えて，殺したい相手を一カ月ぐらいかけて，少しずつ体力を衰弱させるやり方を勧めている。

お誂え向きのものがあります。こいつは，
相手がどういうわけか，突然の死に見舞われる
　というやつでしてね。
そいつの人形を蝋で作って，
死んだ男たちの眼球の放つ青い火で
　そっと練り上げます。
それで，そいつは段々弱っていくんです。

Then I have fitted you.
Here lie the gifts of both sudden and subtle;
His picture made in wax and gently molten,
By a blue fire kindled with dead men's eyes,
Will waste him by degrees.
(V, ii, 2-6)

この箇所は，フランセスが夫エセックス伯の精力を弱めるために，蝋人

形を用いたというエピソードに対応している。彼女がサイモン・フォーマンを‘father’と呼んだように，大公妃はヘカテを‘mother’（V, ii, 33）と呼んでいる。またヘカテの性的な乱脈振りは，フォーマンの館で演じられたという淫猥な黒魔術の儀式を想わせるところがある。

夫に対するフランセスの仕打ちが事実とすれば，エセックス伯は自分の屋敷で，新婦や従者たちからきわめて不当な扱いを受けていたことになるが，このことも作品に取り入れられている。アントニオの家では，フランシスカと紳士アバーゼインズが内緒で恋愛関係を結んで，イザベラはフランシスカが「兄の家と信頼を悪用した」（‘Abused her brother's house and his good confidence.’ III, ii, 57）と義妹を非難する。一方，シーリオに変装したセバスチャンがイザベラの召使いとして入り込んでおり，私通の機会をねらっており，主人アントニオの屋敷を悪用している。「若い妻が，夫に忠実でない」（III, ii, 52, 162）というイザベラに対するフランシスカの告げ口は虚言であるが，彼女が意図しないところで真実――シーリオ（セバスチャン）とイザベラの関係――を暴いているところがある。また，イザベラがシーリオのことばに従って，フェルナンドの屋敷を訪れるのは，彼女にシーリオの誘惑を期待しているところがあるからだ，と考えられなくもない。

前述のように，フランセスはカーと正式に再婚する前，腹心の友ターナー夫人の館を逢引きの場として利用したようである。同夫人は，一見，豪華な調度を整えた自分の邸宅で，貴族たちが束の間，快楽に耽ることができるように，女性を斡旋することもあった。劇の中では，シーリオのセバスチャンが，友人フェルナンドの館をそのようなあいまい宿として利用し，娼婦フロリダにイザベラの寝室の鍵を渡したり，イザベラを誘い込んだりするのである。

このように劇の中で，モラル面での空白がラヴェンナの宮廷を覆っており，特にアントニオの妹で16歳のフランシスカの公然たる破廉恥な堕落振りはその一端を示している。彼女は性的に奔放でありながら，「自分の

名誉」（‘credit,’ II, i, 59）を慮り，戯れの恋で懐妊したことで罪悪感に悩まされている（115）。このことをイザベラに知られて，兄アントニオの怒りを招くことを恐れ，自分の身を守るために，義姉を陥れようとさえする。彼女は道徳的にまったく無責任であり，名前・年齢・性格の点で，実在のフランセスに類似するところが少なくない。

フランセスはエセックス伯との結婚を無効にするために法律上の許可を必要としたが，このことも作品の中で暗示的に言及されており，フランシスカとアバーゼインズに結婚を誓わせるアントニオの台詞のなかに見られる。「こうすれば，有効な離婚の認可は必要ないだろう。この取り決めがいやだとしても」（‘You shall not need / A strong bill of divorcement after that, / If you mislike your bargain.’ V, i, 50-52）とアントニオはいう。

しかし，フランシスカだけがフランセスの分身というわけではない。イザベラが結婚後も処女であるという点では，フランセスが部分的にイザベラのモデルになっている。また大公妃の行為にもフランセスを連想させる要素が窺われる。夫に対する大公妃の復讐という副筋は，モンテーニュの *The Florentine History* 中の挿話に基づいており，17 世紀スチュアート朝のイギリスの現実との直接的な関係はない。 が，大公妃はアルマキルデスを雇って大公を殺させようとする。このことはオーヴァベリーが，ロンドン塔に幽閉される少し前に，フランセスがアン王妃の従者 Sir David Wood を呼んで，オーヴァベリー暗殺の話を持ちかけたことに符合している。[22]

> 「デーヴィッドさん，あなたはオーヴァベリーのためにつらい目にあったけれど，これまでの借りを返すことができる方だそうね。あの男はあなただけでなく，わたしやほかの人たちにもとてもひどいことをしてきたのよ。あの男を何とか片付けることができないかしら。」
>
> ‘Sir David, I hear you have received great <u>wrong</u> of Overbury, and that you are gentleman that can revenge the <u>wrongs</u> as well as any.

That man has wronged not only yourself but myself and others exceedingly, and I would be glad that we were rid of him.' [23]

大公妃も'injury'（='wrong'）に対する復讐（revenge）を人殺しという極端な手段によって果たそうとすることで（V, iii, 91），現実のフランセスと相似している。

また，大公妃は夫を殺害したあと，アルマキルデスを謀殺し市長と再婚するという計画を練るが，アルマキルデスはこのことを感知して言う。「水曜日になって，まだ生きていたら，流動食には気をつけて，食べないことにしよう。」（'if I live Wednesday, / Say I have been careful and shunned spoon-meat.' IV, i, 43-44）　これは，フランセスが入獄中のオーヴァベリーへの差入れとして，毒入りのタルトやゼリーをロンドン塔長官代理 Sir Gervase Elwes 宛てに届けたとされる事件に対応している。[24]

特に注意したいのは，'wrong'という語が，すでに引用したイザベラやフランシスカの台詞だけでなく，フランセス本人が実際に話した会話の中でも用いられていることである。

オーヴァベリー事件との関連では，アントニオが毒入りのワインを召使いハーミオに持って来させて，自らそれを飲むくだりもその一つである。ハーミオは主人の指示にそむいて，毒を入れなかったので，このときアントニオは死を免れる。オーヴァベリーへのフランセスの差入れには，先述のタルトなどのほかにワインもあった。エルウェスが部下の看守ウェストンに指示して，毒入りと疑われるものはぜんぶ抜き取って囚人に渡したというエピソードを想起させる。[25]

結　語

この劇の中でいささか奇異に思われるのは，作中人物たちが驚くほど気軽に魔女のもとへ相談に出掛けることである。最も聡明そうに思われるセ

バスチャンでさえ，ヘカテの巣窟に出向く。彼がそこを訪ねるときも，立ち去るときも，自己嫌悪を感じている様子は明らかであるが……。なぜ彼らが自分の理性を放棄し，自由意志の働きを否定して，手っ取り早いが悪魔的――機械的かつ暴力的な手段に訴えようとするのか，と観客や読者は疑問を抱かずにはいられない。

本来，魔術は健全な思考の持ち主なら拒否するはずのいかがわしいトリックであり，キリスト教の信仰を支えとする市民社会から排除されるべき暗黒の領域を占めている。しかし，ジェームズ朝の英国では，オカルト魔術を看板にする詐欺師まがいの連中に引き寄せられる者たちが少なくなかった。サイモン・フォーマンにフランセス・ハワードが心酔したのは，その代表的な例であり，彼女を中心として引き起こされた二つの事件――エセックス伯との離婚訴訟とオーヴァベリーの死は，政治，性，暴力が魔術と結びついて人々の関心を集めたのだった。ミドルトンは『魔女』の素材としてこれを利用し，世間体を気にしながら欲望の虜になっている人々の織り成す世相について観察し作品化した，と考えられる。

フランセスは，ジョンソンの『女王たちの仮面劇』（*The Masque of Queens*, 1609）やサミュエル・ダニエルの『テテュスの祭り』（*Tethys Festival*, 1610）に出演し，ダンスを披露するなど，ジェームズⅠ世の宮廷で色香を振りまくスター的個性の持ち主だった。が，彼女は，政治的な権力闘争というゲームのなかに配置された将棋の駒のような存在であり，女性というジェンダーのために男性の政治抗争のなかで翻弄された。一方，『魔女』の大公妃はジェンダーとしての役割を意識しながら，政治的なパワー・ゲームを掌握する権力者に保護を求めることで敗北を免れようとする。[26]

ヘカテたちの場面に関しては，陰謀と復讐の悲喜劇という基本的な骨格が作られた後で挿入されたようである。魔女たちの存在は不必要に思えるが，復讐と性的な欲求の充足によって，主要人物たちとのグロテスクな類似の諸相を誇張し，かつ対比的に示す役割を担っている。『魔女』におけ

る貴族たちは，たえず社会の評価（reputation）を意識しているが，魔女たちはそんなものにはお構いなく公然と悪への指向性を示し，快楽を自己充足的に追求して，両者の対照は貴族たちの偽善性を浮き彫りにする。魔女たちは奔放，突飛，奇妙であるが，視覚的に観客を楽しませる。彼女たちの場面は概して喜劇的であり，陰惨な恐ろしい場面で構成される主筋や副筋に対する緊張の緩和にもなる。ミドルトンはこのような効果を考え，超自然的なものに対する当時の関心や魔術に関する劇的表現の流行を利用することを思いついたのであろう。[27]

魔女たちはセバスチャンの要求に応え，嫉妬や復讐という悪意による呪縛を成功させるが，否定的破壊的な行為に終始している。魔女たちの弱点は，永続的な真実の愛を作り出し得ないことである。[28]　作者はこうした魔術の信奉者を風刺しており，劇の終結部ではその批判的な意図を提起している。大公妃はヘカテの黒魔術でアルマキルデスを殺そうとするが，トリックの失敗が露顕する。彼を見た大公妃は驚いて叫ぶ。「アルマキルデス？　時間が経って，彼は助かり，わたしは身の破滅ということになるの？　当然の報いね。」（‘Almachildes? / Hath time brought him about to save himself / By my destruction? I am justly doomed.’ V, iii, 103-105）

「魔女」はこの劇のタイトルであるが，それは職業的な女魔術師に限定されるのではなく，男たちを「惑わす」（‘bewitch’する）女たちすべてを指している。実在のフランセスは男を蠱惑するきわめて「魔女」的な女性だが，彼女の性格は劇中三人の主要な女性に分散して描かれている。作中のどの女性も現実のフランセスほどには強い個性を備えておらず，そのため観客は感情を移入し，同化し得るような人物を見出すことができない。それは作者が一，二の人物に焦点を当てるのではなく，社会全体の世態，特にオーヴァベリー毒殺事件で明るみに出た宮廷の腐敗を戯画的に風刺したからである。その中で，『魔女』の作中人物たちは，犠牲者は自分であり，悪いのは社会や他人であることを強調するために‘wrong’や‘abuse’ということばを多用するが，観客はそれを額面通りには受け取れない。これ

らのことばの濫用によって何が真実であるかが曖昧になり，視点を変えることによって正義というものの存在があやふやになる――ミドルトンはそのような世界を描いているということができるのである。

注

1. Elizabeth Schafer, 'Introduction,' *Thomas Middleton: The Witch* (London: A & C Black, 1994), p. xi.
2. Peter Corbin and Douglas Sedge, 'Introduction,' *Three Jacobean witchcraft plays* (Manchester: Manchester Univ. Press, 1986), pp. 13-14.
3. Alfred Harbage, *Annals of English Drama: 975-1700*, rev. S. Schoenbaum (London: Methuen, 1964), p. 104.
   cf. W. W. Greg, *Dramatic Documents from the Elizabethan Playhouses* (Oxford: Clarendon Press, 1931; 1969), p. 358 では，「1620-27 年頃」と推定。
4. Beatrice White, *Cast of Ravens: The Strange Case of Sir Thomas Overbury* (London: John Murray, 1965), p. 17.
   cf. Anne Somerset, *Unnatural Murder: Poison at the Court of James I* (1997; London: Phoenix, 1998), p. 5 によれば，フランセスは 15 歳，エセックス伯は 15 歳になろうとしていた。
5. Somerset, p.100.
6. A. L. Rowse, *Sex and Society in Shakespeare's Age: Simon Forman the Astrologer* (New York: Charles Scribner's Sons, 1974), p. 258.
7. Somerset, p.169.
   cf. White, p. 76 によれば，9 月 14 日。
8. Corbin and Sedge, p. 14.
9. John Warrington, *Everyman's Classical Dictionary* (London: J. M. Dent, 1961; 1970), pp. 260-61.
   M. C. Howatson, ed., *The Oxford Companion to Classical Literature* (Oxford: Oxford Univ. Press, 1937; 1989), p. 261.
   G. ジェニングズ著（1964），市場泰男訳『エピソード魔法の歴史――黒魔術と白魔術』（社会思想社，1979），p. 77.

10. Corbin and Sedge, p. 15.
11. *ibid.*, pp. 15-16.
12. K. M. Briggs, *Pale Hecate's Team* (London: Routledge and Kegan Paul, 1962), p. 84.
13. Anthony Harris, *Night's Black Agents: Witchcraft and Magic in Seventeenth-Century English Drama* (Manchester: Manchester Univ. Press, 1980), p. 71.
14. Harris, p. 72.
15. *ibid.*, pp. 73-74.
16. *ibid.*, p. 90.
19. Corbin and Sedge, p. 19.
20. White, p. 33.
21. cf. 作中では，蝋でできた心臓，農夫の人形などに言及されている(I, ii, 47-48)。
22. Beatrice, p. 58; Somerset, p. 128.
23. Somerset, p. 128.
24. *ibid.*, pp. 191ff.
25. *ibid.*, pp. 196-97.
26. Swapan Chakravorty, *Society and Politics in the Plays of Thomas Middleton* (Oxford: Clarendon Press, 1996), p. 153.
27. Harris, p. 79.
28. *ibid.*, p. 80.

Synopsis

Middleton's *The Witch* and Lady Frances Howard: Frequent Usage of 'Wrong' and 'Abuse'

Katsuya Hiromoto

The Witch (written before 1617), a tragi-comedy by Thomas Middleton, paints a picture of a society where sex, magic and intrigue are closely related to each other in ordinary life, and where people have an idiosyncratic view of 'honesty', i.e. chastity. Throughout the play, such words as 'wrong' and 'abuse' and their variant forms are frequently found in the discourse of the characters; therefore, I intend to analyse it in terms of the plot, historical background, and language.

The characters in this play can be divided into five groups: ① Sebastian and Isabella, ② Antonio and Isabella, ③ Antonio and Florida, ④ Francisca and Aberzanes, and ⑤ the Duke and the Duchess. The main plot focuses on ① and ②, arousing the audience's curiosity as to who will first cause Isabella to lose her virginity. Of these groups, ⑤ is the focus of the sub-plot, which shows how the Duchess carries out her revenge against her husband, after she was forced to drink up from a cup made from the skull of her father, who was defeated by the Duke. A side-plot unfolds around ④, revealing the aftermath of Francisca's pregnancy. These events are interspersed with the scenes in which the witches appear, the absurdity of which eases the tension felt by the audience.

Wrongdoing is evident in each plot, signalled by such words as 'wrong'

and 'abuse'. Sebastian complains about the injustice of Isabella's marriage to Antonio. The Duke abuses his father-in-law's skull as a wine cup, while the Dutchess manipulates the men surrounding her, making use of her sexual appeal. Francisca pins the guilt on Isabella, who reprimands her for her affair with Aberzanes.

In terms of the relationship between these fictional characters and the real personages on whom they may have been based, Antonio resembles Robert Devereux, 3rd Earl of Essex, whereas Sebastian is most likely similar to Robert Carr, Viscount Rochester, (later Earl of Somerset), although different in some crucial areas. Francisca, the Duchess and Isabella may all be partially modelled on Lady Frances Howard, although the first of them has the closest affinity with her, in terms of name, age and character. Furthermore, in various parts of the play can be found what appears to be references to the death of Sir Thomas Overbury, who is said to have been poisoned while confined in the Tower of London.

The witches of the title are reminiscent of an astrologist, alchemist, and wise woman whom Frances consulted for advice on obtaining a divorce from the Earl of Essex; the additional implication is that they are women who bewitch men using every trick and wile. However, the author satirises the way women themselves fall into the trap they set in trying to cozen men. The most significant demonstration of this takes place in the final scene, in which the Duchess is astonished to see Almachildes, whom she had attempted to kill, and it is revealed that Hecate's black magic was not, after all, effective.